令和４年度　労働災害防止論文

金賞

「ヒヤリ・ハットに対する心構え」

北海道クリーン・システム株式会社　平　川　千　帆

私は現在、札幌駅に直結している大型複合商業施設のＪＲタワーで働いており、『Ｔコメット』という愛称で呼ばれています。Ｔコメットの業務は、お困りのお客様へお声掛けや館内の清掃、施設の不具合を報告するなど、お客様が快適に買い物を楽しむ手助けを行っています。私達Ｔコメットは普段、ダストパン（ちり取り）とブルーム（箒）をセットにして巡回を行い、様々な事柄に目を配りながら業務に従事しています。それ故に、お客様やショップの商品、館内のディスプレーなどとの接触事故と常に隣り合わせです。その中でダスタークロス掛けを行っている際に、私が体験したヒヤリ・ハットと改善について紹介します。

私達は普段、角を曲がる際は、お客様が角の内側を最短距離で曲がってくる事を想定して、外側を曲がる『アウト歩行』を行います。その為、お客様が急に飛び出してきたとしても、接触や衝突から免れることできます。ですが、ダスタークロス掛けの場合は、通路の端を壁に沿うようにして除塵を行う為、アウト歩行ができません。また、ダスタークロスのヘッドの長さは約65㎝あり、私の肩幅よりも広い為、無理に外側から曲がろうとすると、かえってお客様の足に引っ掛けてしまう危険性があります。その為、Ｔコメットでは角を曲がる手前で、壁側にヘッドの部分を平行につけ、上半身をやや傾け、角を曲がった先にお客様がいないかを確認してから、歩き出すように統一しています。しかし、お急ぎのお客様やベビーカーを押したお客様、荷物を台車で運搬する業者の方が角を曲がってきた際は、角近くで待機すると危険な場合があります。

私がダスタークロス掛けを行っていた際、角に差し掛かった為一旦止まり、死角の先を確認しようとした瞬間、ベビーカーを押したお急ぎのお客様が、角から飛び出してきたのです。急いで、自身の身体を引いた為、接触せずに済みました。もし、気付くのが遅れていたら、お子様にも接触していた可能性があり、血の気が引きました。ＪＲタワーは、ＪＲ・地下鉄・バスの公共交通機関へのアクセスの中心ということもあり、上記の体験に似たヒヤリ・ハットは、意識しながら巡回をしていても、幾度となく遭遇します。

このような体験に対し、どのように対処すれば危険を察知できるのかを考え、二つの対処法を実践しました。

一つ目は、曲がり角の先を確認する前に「いらっしゃいませ」と死角にいるお客様に聞こえる様に、大きな声と明るいトーンで発声し、自身の存在をお客様へアピールすることです。お話に夢中になっているお客様にも効果があり、曲がり角でスピードを落として頂けることが多くなりました。また私達だけではなく、周囲にいらっしゃるお客様同士の接触や衝突の防止も期待できます。

二つ目は、車の運転と同様に聴覚と視覚を研ぎ澄ますことです。お客様から発せられる声や足音の確認、壁や床に映る影の動きなどから情報を得ます。特に帰宅ラッシュの時間帯は沢山のお客様が行き来する為、通行の妨げにならないように、予め角から離れることにより、早い段階で危険を回避することができます。また、左右だけではなく後方も怠らず確認することにより、追い越そうとされるお客様にも注意することができます。

以上の二点を踏まえ、常に角の先には、お客様がいるものだと意識をすることにより、ダスタークロスだけではなく、日常起こり得る危険を回避しています。

最後に、ＪＲタワーは今年から大きく姿を変えようとしています。ＪＲタワーと共に私達も大きく成長する為に、より良いサービスの提供を心掛け、お客様が安心してご利用いただけるよう、笑顔とおもてなしの心を忘れずに日々邁進して参ります。

令和４年度　労働災害防止論文

銀賞

労働災害から人をまもるために

北海道クリーン・システム株式会社　樋　渡　宗　之

機械化や自動化などの技術が進歩する現在でも人が主体となる業種は多くあります。労働災害は人が携わる上で常に隣り合わせとなるもののため、どのような対策が必要かを普段から意識することが重要です。私は北海道新幹線のグランクラス車両へ荷物の積み降ろしを主に行っており、その中から自身の体験をもとに労働災害が発生する要因として人が関係するものについて考えていきます。

私たちが関係する業務は前述のとおり人が主体となって行われるものが多いので、安全や労働災害について日々共有され注意喚起が行われていることと思います。まずは日ごろ見慣れているものに対する不注意によって発生してしまう事象についてです。私たちの箇所は作業にあたるところでは小さな段差や階段が多くあります。作業用具を持って通る、台車を押した状態で乗り越えるなど、ごく当たり前に行っていることではありますが躓きや転倒の危険性があるのはもちろんのことです。しかし、日々の業務で通る場所であっても荷物で視界が悪く段差が見えていなかった、忘れて躓いてしまったという事象が発生しています。幸いにも何事もなく済みましたが転倒して怪我をする危険性を考え、再度注意喚起を行った上で階段付近や段差が目立つ場所についてトラテープを貼り付け、躓きや段差注意を促すピクトグラムを利用し対策をしています。

次に周囲からの影響で発生するものについて、普段から気を付けていても対策が難しい場合です。身近なものでは死角がある見通しの悪い場所や扉を出入りするときの出会い頭などがあります。私たちが新幹線に積み込む荷物はサービス品を搭載しているカートと備品を載せた台車が主になりますが、これらを運ぶとき乗り換え改札と売店、エスカレーターの前を通過する必要があります。売店周辺はかなり見通しの悪い死角となっており、利用者が飛び出してくる可能性も高く特に注意が必要な場所になります。このような場所では出会い頭による衝突の危険性が重要視されますが、労働災害の視点から考えた場合は回避行動による危険性が出てきます。考えられるものとしては急ブレーキを掛けたときに膝を痛める、足を捻ってしまうなどの可能性があげられます。死角からの飛び出しのような突然発生するものについては物理的な対策が難しいため、日々の危険予知として死角を通るときは徐行や一時停止をして前方をしっかり確認するよう作業者同士で共有しています。

そしてコミュニケーションについて。労働災害の発生は同じ作業を行う場合でも、各々で手順が違うときや手を抜いてしまうことが原因の場合があります。基本として定められた手順とは別の作業をしている人が居た場合には、そのことを伝え基本通りに直してもらうことが重要です。意思疎通が取れていない場合は「あの人のことが嫌いだから言うことを無視しよう」「私のほうが正しいことをしているからこのままでいい」という考え方が出てきてしまいます。このような考えが見受けられるときは意見交換を行い、気軽に相談できる環境を作っていくことが必要になります。その上で基本について再度周知を行い理解してもらうことで、コミュニケーション不足による労働災害の芽を摘み取ることができると考えます。

労働災害を防ぐためには個人が意識することと日々の情報共有や注意喚起が重要となりますが、そのベースとなるものはコミュニケーションであると考えます。自身が段差や死角を危険と感じたとき、意思疎通が取れていれば速やかに伝達し共有することができます。そうでなければ報連相が途切れ、伝えるべき事柄が周知されず事故につながる可能性が増えてしまいます。私はこのようなことを避けるため積極的にコミュニケーションを取り業務にあたるよう心掛けていきます。

令和４年度　労働災害防止論文

銅賞

「労働災害防止対策への私の考え」

北海道クリーン・システム株式会社　川　角　光　輝

私は現在、ＪＲ北海道が、その用途を終えた車両の解体業務の監督業務に就いており、主な勤務地はＪＲ北海道の現場で札幌の苗穂工場、函館の五稜郭車両所、釧路の釧路運輸車両所で、協力会社によって車両解体及び解体後の石綿含有塗料の除去をおこなっており、品質の良い作業が安全に行われるよう管理監督することが主な業務となっております。

車両解体工事及び石綿含有品の除去工事は、労働災害になる危険と常に隣りあわせの作業です。過去には労働災害も発生しており、それはなぜ起きてしまったのかを私なりに考えてみました。

１点目は、冒頭にある通り作業の手順を守らないで作業を行っている点だと思います。最初は手順を守って作業していたとしても、月日が流れていくにつれて、作業手順を飛ばしてしまう点だと思いました。

２点目は、「自分は怪我をしないから大丈夫だろう」と思い、手順に従わず自分の感覚で作業してしまうところだと思います。例えば気温が高い日などは熱中症などにならないように作業しますが、気温の暑さゆえ、つい気が緩んでしまい安全に作業をすることをせず自分の感覚で短絡的に作業してしまい、労働災害を発生させてしまう危険性を高くしてしまう点だと思います。

３点目は作業中「このようにしなければならない」と決められている事柄をしっかりと行わないことだと思います。車両解体時に車両の乗降ドアから降りる時には、手すりをしっかりと持って乗降するように決められているのですが、その手すりを使わずに飛び降りたりすることがあるからです。まだ車両の乗り降りで労働災害は発生していないものの、怪我をする可能性がないとは言い切れません。決められたことはしっかりと守らなければならないと思いました。

ではこれら３点について、どのように対策を取るべきなのか、自分なりに何点か考えてみました。

１点目は、作業手順は必ず守ることです。作業手順はこれまでその作業に携わってきた多くの先輩作業者の皆さんが色々な失敗や経験からより安全に作業できる手順として組み立ててきたものです。当たり前のことですが、ひとりひとりが、「手順を守ることで安全に作業できるのだ」という意識を持って頂いて作業に取り組んで頂くことで、少しでも労働災害が減っていくと思いました。

２点目は、自分だけは大丈夫だという意識を捨てることです。「怪我の芽はいつもそばに、そしてどこにでもあるのだ」という思いをもって自分だけは大丈夫という意識を払拭することが重要だと思います。

３点目は「安全に関する勉強会をする」ことだと思います。なぜならば、そもそも、決められていることを知ることが必要だと思います。決めごとを守らないことの背景には、一部知識不足もあるのではないかと考えました。現在は年１回の安全会議を行って、過去の振り返りなど、様々な事柄を互いに理解しあうのですが、コロナの影響もあり大規模では実施できておりません。参加者が次々に伝えていくことで、補完していますが、コロナが収まってきたときには、実作業に携わる多くの作業者が同じ内容を同じ場所で理解できるよう「安全会議」を充実させていくべきだと思います。

車両解体工事や石綿含有塗料の除去工事では、作業工程の予定通りに進まないことが頻繁に発生します。作業者としては焦ってしまう場面もあり、そのような状況を見ることもありますが、安全に関する意識を再確認して焦らず、急がず常日頃から協力会社の皆さんに伝えて、オーナー様の求める、「安全で品質の良い作業」がこの先も続いていけるよう微力ながら日々の監督業務に邁進していく所存です。

令和４年度　労働災害防止論文

佳作

『重大事故と贖い（あがない）の日々』

株式会社クリーン開発　田　村　久　志

災害は忘れた頃にやって来る。この言葉は誰もが、一度聞いたことのある名言です。

労災、つまり労働中に発生する事故災害、これもまた、忘れた頃惹起するのではないだろうか。つまり緊張の継続が一時途切れる等油断による過失、つまり不注意である。

学者の言葉に緊張感の継続できる状態は、普通の人で、約15分位だそうである。車の運転が特にその一例である。

従って緊張感を長い時間継続することは大変難しく困難なことが判ります。その為には何をすればそれを補うことができるのか。

私は一つ提案したいことがあります。緊張感が徐々に薄れることは、注意が散漫になることであり、その遠因には例えば時間が無いので急いでいる、出発が何かの原因で遅れた、等の焦りから事故に繋がるわけです。又径路を熟知していない、行先が明確でない、仕事の内容を十分理解していない、等を考え乍ら仕事に従事したら、当然事故が惹起しても不思議ではないと考えます。

学者が大事故を起こす以前に数百、数千の遠因、誘因が既に発生していることを指摘しています。然し乍ら本人はその事を殆んど気付かないか、又は蔑ろにして改善しようと努力しようとしないのが、現状なのです。

例えば、車の事故一つを考えてみれば良く判るように、近頃車の数の多いのには大変驚きますが一家に一台の時代はとうに過ぎ去り一人に一台の時代です。車両での死亡事故は30％はスピードの出し過ぎと言われています。だとしたら一般労働等での事故は30％の緊張や集中力等の欠如によるものなのか。メンタルトレーニングもせず、ただ漫然と仕事に従事しているのが現状なのでしょう。

最近では、草刈作業中に飛石で車輌を傷つけたり、怪我を負わせたりする事故を耳にしますが、考えてみればある程度改善できる余地はあると思うわけです。

一人で仕事に従事している場合を除いては数人で作業をしている場合、当該グループの長、或いは同僚がケアーすれば多少防ぐことは可能であることは皆承知のことですが、それが意外に欠如しているのが現状なのです。

一言声をかければ防げる場合もあるのではないか。例えば、草刈をする場合膨大な敷地は別として、予め刈る範囲の地面の状態について点検をして確認する。勿論全員で細部について十分把握することにより、皆が承知できるわけで、石が散見されれば、取り除き、溝や障害物があれば表示をする、危険な箇所については、明示するか全員に熟知させる。それらを怠ることが、ケアーレスであり事故発生の遠因、原因を惹起させるのではないでしょうか。確かに定められた時間内に作業を終わらせると言う、ノルマが課せられた以上、どうしてもおろそかに成る部分は多少あることは否定はできませんが、然し、当該安全に又は点検に取られる時間により、実質作業時間が短縮されたことで、作業が雑に成ったり、急ぐことにより別な不安全要素が惹起するようでは、なんの為の安全点検なのかが、理解できなくなる。

つまり、安全が第一で作業を終了させるには、十分な時間と余裕が不可欠なのである。

一旦事故が発生し、原因、動機、事故対策、人傷等に費やす時間や経費等を考えれば、本来一日で終る作業が二日に伸びても大した損失にはならないのではないでしょうか。

下手をすれば、当該作業が滞ることもありえるし、失墜することだってありえる問題だと考えます。

先ずグループで作業をする場合、一人一人に責任の所在をはっきりさせることが、特に重要だと考えます。責任を意識せず作業に従事した場合、必ず不安定要素が顕著に現れるものです。これこそが絶対になくさなければならないわけです。従って安全を疎かにすると、贖う日々が待っている事を忘れずに！

令和４年度　労働災害防止論文

佳作

労働災害防止について

株式会社キタデン　松　岡　孝　浩

「安全第一」という言葉を、多くの方が耳にしたことがあるのではないでしょうか。

どんなにいい仕事や、目的を達成しても、労働災害が起きれば、その成果は、ないに等しいものです。本人はもとより、家族、関係者、会社など、得をすることは何もないと思います。今回この論文を書くにあたり、労働災害について、自分への注意喚起も含め、事故事例と対策を学び、労働災害防止に努めてまいりたいたいと思います。

労働災害は、労働災害安全法に定められています。簡単に言えば、労働者が仕事に就いている時に事故にあったり、けがをしたり、病気になったりすることです。労働災害は、なぜ起きるのでしょうか？すこし考えてみました。たとえば、基本的な事を実施しなかった。慣れによる作業のマンネリ化。知識の不足によるもの。思い込みによるもの。

その日の心身の状態によるもの。作業の効率化を重視し、安全対策を二の次にした事。などがあると考えられます。対策としては、作業実施前の健康状態を把握する。予想される危険を考え、対策を講じる事が必要であると思います。また、人間は機械ではないためヒュウマンエラーという事もあります。これを防止するために、例えば低圧電路の絶縁抵抗の測定を例にあげると、確実にブレーカは「切」にしているか。実施したつもりや思い込みを点検確認するためにも、二人で作業を実施し、作業に誤りがないかを確認する。そして誤りがあればそれを正す。作業を実施しながら､ブレーカ「切よし」と声を出すことも必要であると思います。

それでは、事故事例について調べみました

身近な用具である、脚立の事故は、転落の危険を感じず、使用する人が多いようです。

脚立の上でバランスを崩し転落した。脚立を壁に立てかけて上がり、脚立の足が滑り転落した。開きとめ金具のロックが不十分であり手を挟んだ。骨折、捻挫、打撲、靭帯損傷、脳しんとうなど、多くの負傷例があるようです。対策としては、脚立の天板には上がらない。一人で作業せず、正しく脚立を使用する。あせらず、あわてず、安全意識をもち、作業を実施することが、重要であると思います。

次に感電事故について調べてみました。感電事故は､７月から９月に多いようです。これは、暑いために汗をかく。皮膚の露出。注意力の散漫。雨の日の活線作業。絶縁性の工具を使用しなかった。貫通ドライバー使用によるもの。思い込みや勘違い。ヒュウマンエラーによるものもあります。対策としては、安全確実な作業を実施するのはもちろんですが、濡れた手で電気器具を扱わない。暑い時期の汗にも注意を向ける。皮膚の露出を少なくする。絶縁性の工具や手袋を使用する。

また、自分の身は自分で守る心構えも大切であると思います。

労働災害は注意しても起こる事も予想されます。ハインリッヒの法則に学ぶと。１件の重大事故の背後には、重大事故に至らなかった29件の小さな事故が隠れており、さらにその背後には、事故寸前の300件の異常が隠れている。1：29：300の法則とも言われています。つまり、労働災害を防止するためには、安全意識を持ち、安全確実な作業を実施する。日頃からの不注意、不安全な行動や小さなミスを防ぐ。また、風通しの良い職場の環境や心身の健康にも留意する。ヒヤリハットの事故事例を他山の石とすることも大切であると思います。

さて、私達は日々仕事をしています。

朝「おはようございます」と挨拶をして､「今日も無事故だ」笑顔で帰宅する。

このあたり前の事を大切にして、「労働災害ゼロ」をめざして、仕事に取り組んでまいりたいと思います。

令和４年度　労働災害防止標語　入賞者

金賞

高めよう　一人ひとりの安全意識　みんなの力でゼロ災害
㈱クリーン開発　長谷川　勤

銀賞

急がず　慌てず　無理をせず　ゆとりを持って安全作業
北海道クリーン・システム㈱　毛内智子

怖いのは　覚えた時より　慣れた時　㈱東洋実業　島崎正子

銅賞

焦らず慌てず油断せず　初心に戻り安全確認
北海道クリーン・システム㈱　村上麻実

焦るな、急ぐな、手を抜くな、基本の心で安全作業
北海道クリーン・システム㈱　伊藤則芳

危険箇所　みんなで共有　ゼロ災害！　東京美装北海道㈱　佐藤晃

佳作

あいさつはこころを込めて自分から　笑顔をつなぐ合言葉
オホーツク美装興業㈱　島田祐輔

焦るほど　増える失敗　無くなる信用！　㈱東洋実業　中野須美子

あわてず　焦らず　慎重に　踏み出す一歩を　確実に
北海道クリーン・システム㈱　野呂良一

確認は　人に頼らず　手を抜かず
テルウェル東日本㈱北海道支店　山本弘子

「かもしれない」　予測と準備が　身を守る　㈱東洋実業　大塚優樹

共感と共有　失敗から学ぶ　チームづくり　㈱東洋実業　菊田直樹

誰でも持ってる事故の種　心の中にハザードマップ
㈱東洋実業　山﨑千鶴子

ルールを守って　しっかり確認　徹底させよう　作業基準
㈱東洋実業　早川慶二

忘れるな！慣れと手抜きが事故のもと　北菱産業埠頭㈱　見瀬順一